

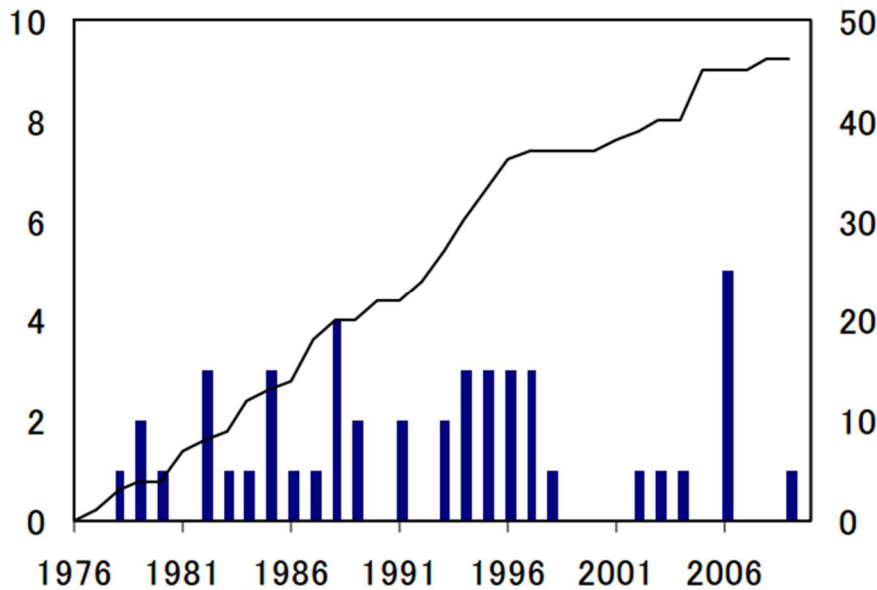


7月24日未明より、伊豆大島近海で群発地震活動が開始

伊豆大島近海では1978年1月にマグニチュード7.0の地震が発生しています。この地震は、日本の地震予知研究にとって、極めて重要な地震でした。歪の変化、前震の発生、地下水のラドン変化、地電流変化など多くの前兆現象が観測され、地震予知研究に大きな希望を抱かせた地震でした。しかし、それ以降の地震では、このような系統的な前兆現象が観測されなかったのです。

また伊豆半島東方沖では、1978年以降、40回以上の群発地震が発生しており、1980-90年代は毎年のように発生していました。特に1989年6月30日から始まった群発地震では、地震の数が低下し始め、その後の7月13日に伊東市沖の手石海丘で海底噴火が発生した事をご記憶の方もいらっしゃるかと思います。

この伊豆半島東方沖（伊東沖）の群発地震の原因は火山活動という事が判明しており、マグマの貫入が原因と考えられています。そのため、歪計という装置でマグマの貫入と思われる現象が発生した場合は気象庁が発表する事になっています。今後震源域がさらに伊豆半島に近づき、伊豆半島の歪計に変化が現れた場合にはなんらかのコメントが発表されるはずです。下の図は1976年から2010年までの伊東沖群発地震の発生回数です（左側の数字、右側の数字は通算発生回数を示す。気象庁資料より）。ここしばらくは活動が低調な時期が続いていました。



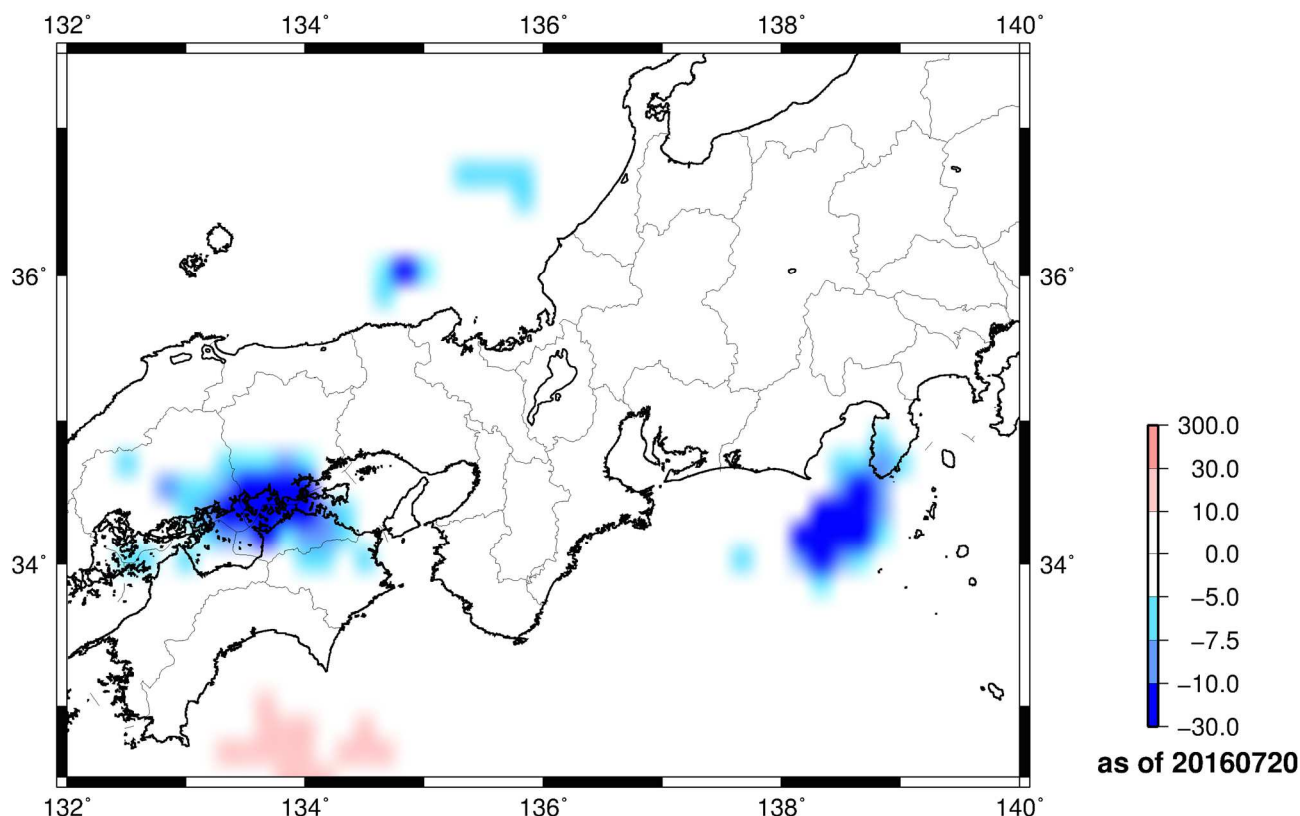
東海地方より西側の陸域にターゲットを絞った地下天気図®

関東地方および東北地方は2011年の東日本大震災の発生前と後で、地震発生のパターンが大きく変わってしまったため、東日本大震災を境として、解析期間を分ける必要があります。それに対し、東海地方より西側の領域では、より長期間のデータを使った解析が可能です。

今回紹介する地下天気図®は2001年からの15年以上の地震活動を用いて解析したもので7月20日時点のものが示してあります。6月13日のニュースレターでお知らせした中国・四国地方の異常がさらに大きくなっています。また駿河湾南方に広がる異常については、面積も小さか



った事から、これまで触れてきませんでした。このように継続して出現している事から今後関心をもって監視していく所存です。



ちなみに下に示した地下天気図は6月10日時点のものです。基本的にパターンは変わっていませんが、静穏化（青い領域）域が広がっている事がわかります。

